

日本の科学者

〈特集〉

近畿の水圏

1986

Vol. 21

NO. 7

7

〈原のことば〉薬を良くするには 上田 亨……………1

瀬戸内シンポジウムの15年 布施慎一郎……………2

琵琶湖の水質問題 吉岡龍馬……………3

琵琶湖総合開発と地域生活 鈴木紀雄……………12

紀の川分水問題 森川 博……………20

〈談話室〉ネバド・デル・ルイス火山の噴火 河内晋平……………24

〈科学の新展開〉行動生態学と動物の社会 粕谷英一……………26

日仏KAIKO計画(Ⅱ)

——潜水艇ノテールによる潜航調査 飯山敏道他……………32

横浜市六浦・上行寺東遺跡の保存運動にかかわって

——市民と研究者の共同作業としての 千々和到……………40

〈資料〉VDT作業に関するあるべき労働条件 西山勝夫……………48

〈書評〉日本住宅会議編『1986年版住宅白書』 城谷 豊……………52

加藤哲郎著『国家論のルネサンス』 清野正義……………53

科学者つうしん……………54 世界のうごき……………58 てがみ・編集後記……………59

日本科学者会議編集

水曜社

加藤哲郎著

『国家論のルネサンス』

青木書店 2000円

先進社会論の中心的研究領域として、国家の研究が浮上している。それは、民族国家として歴史的に登場した近代社会の終焉の物語りとしてであろうか。それとも、近代社会の学問的に回避され、理論的に空白化されていた問題領域への勇敢なる侵入として生じたのであろうか。

ともあれ、先進諸国の社会理論における「国家論ルネサンス」のうずのなかに身を置いて、とりわけイギリスを舞台にしたマルクス国家論の新展開についての、田口富久治をリーダーとする精力的な研究紹介と先進国革命論の立場からの国家論研究において目立った活動をしていた加藤哲郎の80年代前半の研究成果がこのような記念すべき形態でまとめられたことを、研究分野は異なっても同じ問題意識をいだく者の一人として心からよこびたい。

マルクス主義における国家論は、マルクス・エンゲルスからレーニンまでの時代から、グラムシの特異な国家論とアルチュセール・プーランツァスの「国家論の革命」を経て1970年代に入ったときには、国家論のプロブレマティクは根本的に変革されていた。それは、南ヨーロッパの諸国における社会変革の新しい波、ユーロコミュニズム、とりわけイタリアにおける先進国革命の魅力的な可能性への若き世代のインテリゲンチエアの夢をのせて登場したものであったと思う。しかし、その「花の革命」のような時代は、ギリシア出身の英雄的な研究者、ニコス・プーランツァスの不幸な突然の死を契機にして大きく局面転換し、1980年代に入ると、イギリスにおけるサッチャ

ーとアメリカにおけるレーガンの保守ラジカリズムによって加速されて、国家論は再び大きく変貌している。

本書に収められた諸論文は、1980年から85年にかけて公表されたものであり、著者がヨーロッパの国家論の新しい波に深くかかわり、心情とパッションのレベルまで共鳴しつつ研究していた国際的な研究者であることをよく理解しうる内容になっている。1985年夏のパリにおける世界政治学会（IPSA）第13回大会への参加の感想から、政治学における国家論の10年間に回顧した序論「国家論の復権」が著者の立場と学者的パッションをもっとも大胆に表現している。

〈国家論の復権〉は、こうしたグローバルで人類史的な課題とのかかわりでは、まだ緒についたばかりである。その有力な源泉となった〈西欧マルクス主義国家論ルネサンス〉も、70年代の理論モデル構想の段階から80年代に入って本格的な現状分析段階に入ったとはいえ、世界大の国家や核軍争同盟の問題への関心は希薄であり、同じく〈マルクス・ルネサンス〉のなかから生まれた「従属理論」「世界システム論」や「新しい社会運動論」との接合にも、成功しえていない。

そして、この面での国家論の展開こそが、実は、日本の政治学が世界の政治学の発展に寄与しうる一領域であるかもしれない。つまり、日本は、世界資本主義システムの〈外部世界〉から出発しながら、〈周辺〉〈半周辺〉から超スピードで離脱し、いまやアジアばかりでなく世界

全体の〈中心〉に位置するにいたった。世界史的にもユニークなこの〈ホップ・ステップ・ジャンプ〉の過程では、「民主化」「民生向上」をミニマムに抑え東アジア近隣民族を自己の〈周辺〉とする早熟的・畸形的「近代化＝資本主義的工業化」が、〈国民国家〉主導で強行されてきた。その〈中心化〉の過程は、アメリカの「核の傘」のもとで、エネルギー・食糧を海外に依存し、工業生産物を集中豪雨的に世界のすみずみに輸出する、世界資本主義システムに寄生したものであった。そこで、その矛盾・あつれきを凝集的に体験してきた日本とアジアの民衆の立場においてこそ、「西欧化＝資本主義化＝近代化」というモデル＝近代西欧中心史観への本質的批判意識が生まれるのであり、「資本主義的工業化」の副次的随伴物や「国家至上主義的社会主义化」に解消しえない、〈民主主義〉の切実な意味を、理解しうるのかもかもしれない（15～16ページ）

著者のこのような立場は80年代前半の国家論研究の内部で形成されたものではあるが、同時に80年代後半への理論展望として語られている。それこそ、日本の代表的なマルクス主義国家論の研究者、藤田勇と田口富久治の強力な知的影響力圏で自己形成した新しい世代の政治学者に期待されているのであろう。この視角からすると、第2章「西欧マルクス主義の国家論と政治学」がもっとも注目すべき部分であり、とくに国家論と民主主義論の関係性の考察と第3章「ネオ・コーポラティズム討論について」は、著者の伝統的マルクス主義の理論枠組みからの自己解放の方向を分析的に探求したものであると考えられる。

（清野正義・立命館大学）